

光信公ゆかりの地紀行5

津軽藩発祥の地 光信公ここに眠る



住区だったと推定されています。光信が築きあげた種里城は、強敵・安東氏に対する一大軍事基地であり、難攻不落の要塞だったのです。

延徳3年（1491）、岩手県久慈から来た南部光信（後の大浦光信）が本拠地としたのが、鯉ヶ沢町の種里城です。光信は、この城を足がかりに近隣の群雄と戦い、西の大敵である安東氏と対峙し続けました。

光信が生涯をかけた種里城とは、どんな城だったのか？ 今回はその実像に迫りながら、津軽藩誕生への道を開いた光信の後半生を追います。

■光信公の城・種里城

種里城というと、資料館「光信公の館」だけかと思いがちですが、本当の城の姿は、私たちの想像をはるかに超えたものでした。まず圧倒されるのは、



種里城の航空写真



主郭の復元模型（「光信公の館」で展示中）



盛信や家臣らに遺言を残す光信公
切り絵「光信公一代記」（長尾金之助作）

■光信公の死去

種里城に入った光信を待っていたのは、前回紹介したような激しい合戦の日々でした。赤石川流域に勢力を広げた光信は、文亀2年（1502）、岩木山麓の津軽平野側の大浦城（弘前市）を築き、嫡男・盛信に与えます。後に盛信が当主になってからは大浦城が本拠地になりますが、光信自身は種里城に残って安東氏の侵攻に備えたのでした（以後「大浦光信」となる）。

大永6年（1526）、病の床にいた光信は、「甲冑を着せた立ち姿で東南に向けて埋葬せよ」と遺言しました。死んだ後も自分の霊魂は種里の地にとどまり、敵の侵入を許さず、子孫



光信公御廟所（種里城内）
津軽家や種里住民により今も大切に保存されている。御廟所には一本の雑草も生えないと伝えられる。

の代には必ず津軽を平定することを願ったとされています。

同年10月8日、光信は67歳で死去し、遺言のとおり種里城内に埋葬されました。光信の墓は「御廟所」と呼ばれ、現在も城跡の一角に残っています。またその傍らには、切腹して光信の死に殉じた忠臣・奈良主水貞親（種里八幡宮初代宮司）の墓も寄り添うように残されています。

後に、光信から5代目の大浦為信（後の津軽為信）が、南部氏の支配から独立して津軽藩を創業。始祖光信の居城であった種里城は「津軽藩発祥の地」とされるようになります。

秋田県横手市、岩手県久慈市と流転してきた一族の血を受けつぎ、数奇な運命に翻弄されながら戦国の世を生き抜いた武将・大浦光信―この英雄の魂が眠る種里の地で、一つの伝説が終わる、そして新たな時代への扉が開かれたのでした。（町学芸員 中田）